| 京都大学 | 博士(文学) | 氏名 | 森　田　貴　之 |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | 『太平記』の研究 | | |

（論文内容の要旨）

今川了俊『難太平記』には、足利直義が玄恵に読ませた恵鎮所持の『太平記』「先三十余巻」に誤りが多いので修訂作業を行わせたこと、その作業が中絶した後も「近代」にわたって書き続けられたこと等が記されている。軍記物語『太平記』の成立に関する研究は、他に有力な資料のない中、この『難太平記』の記事をほとんど唯一の資料として、それを検証することによって進められてきた。

しかし「近代」書き続けられたという場所や方法など、『太平記』の最終的な成立環境については『難太平記』にも具体的情報はない。また『難太平記』の記事を補うべき他の文献資料も乏しい。したがって、その最終的な成立環境については、『太平記』の内部徴証から考える他はない。本論文は、こうした研究の状況をふまえ、『太平記』中の説話・漢詩の検証によって、『太平記』の成立環境を論じるものである。また、書き継ぎを伴う複雑な成立過程を経た『太平記』の歴史叙述方法や『太平記』諸本の成長過程の一端にも触れた。

第一章第一節では、巻十二から貞慶笠置隠遁説話を取り上げ、説話の成立基盤と『難太平記』にいう恵鎮ら天台戒家との関係を検討した。

まず、説話中に利用されている第六天魔王と天照大神との約諾説話が、阿修羅王が第六天の眷属として登場するなど、他の中世の説話資料とは異なる形式である点に着目し、この形式と天台戒家の重要資料『渓嵐拾葉集』の異説との比較を行った。その結果、『渓嵐拾葉集』には、阿修羅王と天照大神との約諾説話があり、『太平記』と共通する説話基盤を持つことが明らかになった。

また、『渓嵐拾葉集』など天台戒家の周辺資料には、貞慶ら南都の戒律復興運動を天台戒家のそれに先立つものとして位置づけるなど、叡山と南都の戒律復興を並列的に理解する戒律史観が見られる。破戒僧・文観と対照的な人物として律僧・貞慶を賞賛する本説話の役割もこうした天台戒家の戒律史観と合致する。

次に、本説話では、承久の乱の勃発と貞慶の行動とを結びつけるが、史実では、貞慶は承久の乱以前に既に死去している点に着目した。本説話と史実には大きな齟齬があり、この箇所には『太平記』の作為が認められる。この点については、天台戒家の周辺資料でもある延慶本『平家物語』中の、承久の乱関連説話との関係に触れた。延慶本『平家物語』には、承久の乱の原因を文覚の怨霊の動きに求め、そこに文覚と師弟関係にあった明恵を登場させる説話がある。『太平記』に登場する貞慶と延慶本の明恵とは、中世の文学作品において、常に並列対比されて登場する傾向にある。同時に、

貞慶説話を含む『太平記』巻十二周辺には『平家物語』や承久の乱と関わる説話が複数並置されている。内容のみならず、『太平記』巻十二の構成と延慶本『平家物語』との関連も深く、やはり、本説話には、延慶本を介して天台戒家との関わりが想定できる。

以上のように、第一章第一節では、『太平記』中の一説話の背景から、恵鎮周辺、天台戒家と『太平記』との関わりを改めて指摘した。それに対し、第二節では、『太平記』中の漢詩引用例から、『難太平記』には触れられていない『太平記』の最終成立基盤を推定した。

まず、巻四十「高麗人来朝之事」に付載されている典拠未詳の七言律詩は、同時代の元の詩人・迺賢の詩集『金臺集』中の「送慈上人帰雪竇追挽浙東完者都元帥四首」中の一首であることを明らかにした。その内容は、元の慶元で行政長官として活躍し、倭寇禁圧に成果をあげた完者都についての詩であった。また、この詩の作者である迺賢は、至正二十七年（一三六八）まで慶元で活動していたカルルク人であった。すなわち『太平記』はその成立とほとんど同時代の漢詩を摂取したのである。従来、注意されることはほとんどなかったが、『太平記』は実は大陸との同時代性を持つ作品だったのである。

さらに、その出典『金臺集』の元刊本の序跋の年号や版心の刻工名等を検討した結果、元刊本『金臺集』は、至正十五年（一三五五）以降に慶元で出版されたことが判明した。この詩を含むものは『太平記』以前では、この元刊本以外には見つからず、『太平記』の作者も、この元刊本に拠り、この詩を受容したものと認められる。『金臺集』の出版された慶元は当時の江南仏教の最重要拠点であり、多くの入元僧・渡来僧が通交した場所である。そして、『金臺集』に序跋を寄せた文人の多くにも、禅僧との関わりがある。こうした点から、『金臺集』受容の経路として、元代の詩集を即時に入手・閲読できた五山僧の存在が浮上する。『太平記』終末部の成立に五山僧が何らかの役割を果たしたことが推測されるのである。

第三節では、前節を承け、『太平記』の最終巻・巻四十の構成から最終成立環境を検討した。具体的には、『太平記』の最終成立時期にあたる応安年間に勃発した五山・叡山間の紛争事件を踏まえ、『太平記』終末部の叙述方法を検証し、叡山・五山それぞれの勢力と『太平記』との距離を論じた。

『太平記』巻四十では、応安の強訴事件の原因となった、南禅寺山門での闘諍事件は、あくまでも足利基氏・義詮の相次ぐ死を予兆する事件の一つとして、中殿の御会、天龍寺焼失、最勝講での興福寺と延暦寺との闘諍事件など、他の予兆記事と同等に扱われていた。つまり、応安の強訴事件の原因となった事件としては扱われていなかった。それに対して、延暦寺から発行された訴状においては、その騒動を引き起こした張本人として、五山・天龍寺の春屋妙葩が批判されており、直接的に五山を批判しない『太平記』の叙述とは異なっていることがわかる。さらに、『太平記』には、天龍寺

の焼失を慨嘆するなど五山側に立つ記述も見られた。

また、巻三十八「大元軍之事」と叡山の訴状との比較からも、叡山側との差異が指摘できる。当時の叡山からの禅宗批判の根拠の一つとして、禅宗亡国論がある。当時の叡山側の訴状には、その代表例として、中国での宋と元の王朝交代の歴史に触れるものが多い。それに対し、「大元軍之事」の描く宋元交代史には、禅宗亡国論的要素は皆無で、西蕃の帝師が、元を勝利に導くという内容であった。帝師は、元の仏教界の頂点に位置し、禅宗文献にも数多く登場している。加えて、『空華日用工夫略集』には、帝師管轄下の宣政院・行宣政院という呼称が、日本の禅律奉行について用いられていることなどから、帝師が活躍するこの説話は、当時の叡山の主張とは異なり、むしろ五山側の立場に近いと考えられる。

従来、五山と『太平記』との関係は論じられることがなかったが、以上の本論文第一章第二節・第三節によって、少なくともその終末部に関しては、五山禅林との関わりは軽視できないことが明らかとなった。

第二章では、「書き継ぎ」という成立事情を抱える『太平記』が四十巻にも及ぶ長大な歴史叙述をどう継承・展開・終結させたのか、その具体的な方法を検討した。

まず、第一節では、『太平記』に登場する多種多様な人物の描き分け方法を検討することを目指し、『太平記』において多数の用例を指摘できる「運」関連用語の存在に注目した。

『太平記』には、「聖運」「武運」「時運」といった「運」関連用語が多数見られる。その用法は他の軍記諸作品とは異なるもので、『太平記』作者が「運」に対して意識的であることを示している。さらに『太平記』の人物形象において、その人物の「運」への対応法が、人物評価を左右することが顕著に見られる。

まず、「運」の動向を見極め、智謀によってその運に対峙する楠正成を理想的人物とする一方で、「運」の動向を見極め得ず、軽率な行動から落命する新田義貞や細川清氏を批判する手法が見られた。また、たとえ「運」によって敗北を喫しても、「死を善道に守り命を義路に軽んずる」姿勢が評価され、この点においても楠正成が理想的人物として造形されていた。

しかし、足利尊氏だけは例外で、他の人物とは異なり、非意志的でありながらも「運」に守られる姿が描かれている。そして、尊氏を守るその「運」は、内容の明示されない「因果」によって理由づけられていた。こうした尊氏の人物造形は、北野通夜物語など『太平記』後半の歴史評論記事とも共通する。この「運」と「因果」の論理は、それまでに用いられていた人物造形法の規制の下で、尊氏の最終的な勝利を描き出すための工夫と見られ、『太平記』が書き継がれるに際して、刻々と生じる新たな歴史を描かねばならなかった、その作業の困難さを示している。

第二節では、第一節で指摘した楠正成という『太平記』における理想像が、書き継ぎ後の『太平記』に及ぼした影響を具体的に検討した。一つは、後継者である正行・

正儀の人物像に与えた影響であり、もう一つは、中国説話の引用に与えた影響である。

正行・正儀兄弟には、正成の人物像がある程度継承されていることが確認できるが、正儀に対しては、正行と異なり、一部否定的な評価がなされている。この正儀の否定的な人物造形について、『太平記』が足利幕府政権を言祝いで作品を終結させる、その構想からの必然性があったことを指摘した。楠正成は、その提言や遺言において、南朝方にとっての自身の存在価値を繰り返し主張している。『太平記』作者は、物語前半で示された、その言葉の影響下で、幕府の勝利で終わる物語を矛盾なく終結させなければならなかった。そのため、物語内に最後まで生き残ってしまう正儀の「正成的性格」を否定させることになったと論じた。

また、巻三十八「大元軍之事」中の「宋」の伯顔の背後にも、楠正儀への視点を指摘した。宋と元との交代史を描くこの章段では、宋の伯顔と元の帝師が相対する構図がある。しかし、伯顔は本来、「元」の伯顔であるはずで、それが『太平記』では「宋」の伯顔とされ、敗者の側に配置されている点が問題となってきた。説話中で、伯顔は楠正成の千早城での作戦に類似する作戦を実行するが、その一方で、「死を善道に守り命を義路に軽んずる」姿勢の見られないことを批判されてもいる。この批判は、第三部時点での楠正儀の立場・評価と重なる。このことから、この章段の伯顔と帝師との対立構図は楠正儀と細川頼之の対峙する現実の歴史のアナロジーとしても捉えることができる。そして、そこには楠正儀という楠正成の後継者の敗北を明示することで物語を終える意図が伺えた。

以上、第二章第一節・第二節では、楠正成という理想像が、書き継ぎ後の『太平記』の構成にも暗に影響を及ぼし続けていたことを述べた。

第三節では、巻三十九「山名京兆被参御方事」末尾の司馬光の漢詩を採り上げ、作者の中国史への関心を検討した。

この漢詩は、『太平記』において、章段を全体を締めくくる文脈上、王安石・呂恵卿ら新法党批判の詩として解釈されていることがわかるが、その解釈は本来の出典である司馬光の詩文集『司馬温公文集』や詞華集『千家詩選』には明記されていなかった。その一方で、この解釈は、明代詩話『蓉塘詩話』、明代筆記『堯山堂外紀』に収録されている詩話とは共通するものである。この明代の両作品の性格から、この詩話が宋代元代に遡る可能性は高く、『太平記』作者は、中国史や詩話に関心を抱き、高度な知識を持つものであったことがわかる。こうした漢詩・詩話受容の実態は、王安石批判・司馬光礼讃の漢詩・詩話の享受層でもあった、当時の五山僧の立場や知識、関心と符合する。こうした『太平記』終末部の漢詩利用法からも、『太平記』終末部の成立環境として、五山周辺の関与が改めて浮上する。

第三章では、『太平記』の諸伝本から、最も増補が進んだ一異本である天正本を取りあげ、そこに増補された漢詩から増補方法の一端に触れた。

天正本『太平記』巻四には、「晩唐の詩」として増補された漢詩がある。この漢詩は

従来典拠未詳であったが、宋代の禅文献『禅林類聚』や『禅宗頌古聯珠通集』に見られる宋代の禅僧・仏鑑慧懃の二つの頌を恣意的に組み合わせた偽作であった。そして、この「晩唐の詩」は、天正本以外の文学作品には全く見られない漢詩であることから、天正本増補者の意図による偽作であると考えた。

さらに、この二つの頌について、両者の公案本則の内容には全く関連が認められず、公案本則の内容とは無関係に、頌の一部が抽出され結合されていることがわかる。このことから、天正本増補者は、二つの頌の詩句を摂取する際、公案や頌全体から詩句が独立した形態のものに依拠したことが推定できる。この点に着目し、十五世紀以降、流布しつつあった禅語抜書集「句双紙」類の受容を想定した。「句双紙」に依拠することで、公案の内容とは切り離された状態で詩句を摂取することが可能となり、頌の一部のみを結合させることもより容易に行えるからである。本章でとりあげた漢詩一首から、典拠として特定の一書を断定することは難しいが、天正本の偽作漢詩が禅語録を淵源とするものであったことは、「句双紙」のような禅語抜書類によったにせよ、原典の禅語録そのものによったにせよ、天正本増補者が禅的環境と何らかの関わりを有していたことを示している。

以上、主論文は全三章七節から構成される。従来の『太平記』研究においては、叡山との関係が常に問題とされ、その方面の研究にはかなりの蓄積がある。しかし、五山や禅文献との交渉、同時代の漢文資料との交渉については研究は立ち後れている。本論文はその重要性を明らかにする試みであった。

（論文審査の結果の要旨）

南北朝の動乱の歴史を描く『太平記』は、文学作品としての豊かな味わい、面白さによって、また室町、江戸時代の数多くの軍記や物語、あるいは太平記読みなどの諸芸能に及ぼした影響力によって、国文学史上もっとも重要な古典の一つに数えられるものであろう。しかし、それにもかかわらず、この大部な作品は、複雑なその成立事情を明らかにする手段に乏しく、作者についても、ごくわずかな情報にもとづく憶測しかなされずに今日に至っている。国文学の中でも、もっとも研究の停滞している古典作品の一つと言っても過言ではない。

本論文は、そのような難しい研究対象について、諸本研究、人物造形の分析、または説話の分析など、さまざまな角度からの論考を試みるものである。なかでも、大きな成果を得たものとして顕彰すべきは、第一章第二節、第二章第三節、そして第三章の論考であろう。

まず第一章第二節は『太平記』巻四十「高麗人来朝之事」に引用される七言律詩を取り上げる。「日本狂奴乱浙東」の句で始まるこの詩は、従来は、作者の凡愚を露呈するような創作、あるいは作者未詳の落書の類とされることが一般であったが、論者はこれを元・迺賢撰『金臺集』のなかの、倭寇討伐に功のあった将軍完者都の死を悼む詩であることを突き止め、しかも、その『金臺集』の序跋の年号や、版心の刻工の名などを詳細に検討することによって、それが至正十五年（一三五五）に慶元で出版された書物であることを明らかにした。そして、その江南の慶元には五山から派遣された多くの入元僧が往来していたことから、少なくとも巻四十、『太平記』のその最終巻の製作に五山僧が深く関与していたことを推測する。手詰まりの状況が続いていた『太平記』の成立論、作者論に新たな視界を開き、また『太平記』が意外にも大陸の同時代の文学に直接的につながることを明らかにする新鮮な研究として、高く評価されるものであろう。

また第二章第三節は、巻三十九に見える司馬光の詩が明瞭に新法批判の詩として引用されることについて、その寓意を明示する明代の詩話の記事から、さらに元・宋代の詩話に遡るべく博捜し、その調査に基づいて、その詩の引用についても五山の詩僧の関与が認められるだろうことを論じた。確実な資料がなく、一部に推測を混じえざるを得ない点もあるが、ここでも、『太平記』が、おそらくは五山僧を通じて、中国の同時代文学との強い繋がりをもつことが説かれたのである。

そして第三章は、『太平記』諸本の中でももっとも増補部分の多い天正本について、その増補方法の一端を明らかにする論である。まず論者は、天正本の巻四に、「晩唐の詩」として引かれる詩が、実は宋代の『禅林類聚』と『禅宗頌古聯珠通集』に見られる仏鑑慧懃の二つの頌を組み合わせて作った偽作の詩であることを明らかにした。さらに、その二つの頌を共に収める書を求めて、論者は、数多くの禅文献の中から「句双紙」と呼ばれる禅語語彙集に注目し、その諸本を網羅的に調査した。そこで明らか

にされたのは、巻三十九と四十という最終段階の『太平記』に五山禅僧の関与が考えられたのと同様に、その一異本の天正本の増補者についても、五山禅林との関わりを想定しなければならないという事実であった。

従来、『太平記』の作者と成立は天台文化圏の中に推考されることが多かったが、本論文によって、少なくともその成立の最終段階においては、五山禅林との関係を他にしてそれを求め得ないことが明らかになった。本論文のもっとも顕著な功績であろう。

また、『太平記』において元代の文学の受容があったことの指摘も貴重なものであった。今後、さらに多くの例が見いだされることが期待されよう。論者がそれに着目して日はまだ浅く、元代の文献の読解と調査の力は十分とは言えないが、そこにかえって大きな可能性がある。中世国文学における宋元文学の受容という、大きな新しい課題に挑むことも、やがては可能となろう。研究の発展を期待する。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十二年一月十三日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。